

## 「かきまわす」創世神話

－カンボジア・アンコール遺跡群の浮彫「乳海攪拌」から－

● 高橋 六二

### はじめに

昨平成22(2010)年11月8日から15日まで、初めてカンボジア旅行をした。そこで見たものの概略は次のとおりで、いわゆるアンコール遺跡群のいくつかが中心である。

- 9日 (シェムリアップ) アンコール・ワット／バイヨン／アンコール・トム／タ・プローム／影絵
- 10日 (シェムリアップ) クバル・スピアン／バンテアイ・スレイ／アプサラダンス
- 11日 (プノンペン) 国立博物館／シルバーパゴダ／書店
- 12日 (シェムリアップ) 東埔寨民俗文化村／バイヨンインフォメーションセンター
- 13日 (シェムリアップ) アンコール国立博物館／書店／オールド・マーケット
- 14日 (シェムリアップ) バコン／プリア・コー／影絵工房／ロレイ／書店

### アンコール・ワットにて

10時半近く、アンコール・ワットの見学を始めた。西参道正面から環濠にかかる石道をまっすぐに進む。中央祠堂までは500メートルを遙かに超えるのだろうか。熱帯の、青い空と深い森林に囲まれたこの空間はなんと広大なことか。西塔門を過ぎたところで結婚記念の写真撮影をしている一群があり、聖池ごしに中央祠堂の全景を眺め、いよいよ第一回廊から第三回廊までを見巡る。しかし見るべきものがあまりにも多く、果てがどうなるのかわからない不安もあって、だんだん見流して通り過ぎる。最上階の中央塔の仏像や造形を見届けて第一回廊の東塔門を出た時はすでに正午過ぎだった。

アンコール・ワットはスールヤヴァルマン二世(1113年～1150年頃在位)が創建、ヒンドゥー教のヴィシュヌ神に捧げ、自らを埋葬した、東西約1500メートル・南北約1300メートルの環濠に囲まれた寺院だという。大洋を渡り、ヒマラヤ連峰を経巡り、メール山(須弥山)に至って戻り得たことになるというこの行程、ずいぶん急ぎ足だったがやっと一息つけた。その時、目に入ったのが「乳海攪拌」の案内板だった。

第一回廊東面南側に横50メートルほどの壁面いっぱいにあるのが「乳海攪拌」の浮彫である。その、向かって左側半分は公開されて実物をつぶさに見ることはできたが、右側半分はあいにく修復中で実見できないものの、ほぼ実物大の写真パネルがあって様相を想像することはできた。手持ちの旅行案内書(注1)によると、

ヴィシュヌ神の化身である大亀(クールマ)の背に乗せた大マンダラ山を、両サイドから神々と阿修羅(神に対する悪神)が大蛇(ヴァースチ)の胴体を綱として引き合うカンボジアの創世神話である。中央には采配を振るうヴィシュヌ神の姿も見られる。綱引きをしながら海中をかき回すといった攪拌が1000年も続き、海は乳海となり、そのなかからアプサラや

ヴィシュヌ神の妻となるラクシュミーが生まれ、最後に不老不死の妙薬「アムリタ」が得られたという神話が描かれている。

とあり、この浮彫の内容はひととおり理解できた。

これを数葉の写真とともに説明を加えておこう。まず中央部分(写真1)は底部に大亀が頭を左向きにしており、それが海中であることはさまざまな魚群や鱷、海獣と思われるものがあることでわかる。しかもそれらが入り乱れ、ひしめいているのは攪拌による荒れ模様、まさしく乳海のようなすを現しているのだろう。亀の甲羅の上から細い斜線などで描かれている筒状のが大マンダラ山である。その中腹を両脚で囲み込むようにしてこちら側には背を見せ、顔を右側に向けて踏ん張るのがヴィシュヌ神である。手が四本あり、下の二本は大マンダラ山に巻き付けた大蛇の胴体をつかみ、上の二本は呪具を振るっている。ヴィシュヌ神の右には神々が一様にこちら側に顔を見せ、左には同様に悪神たちが大蛇の胴体を抱えて続き、双方で曳き合って大マンダラ山で海中を攪拌している。両神群の上部に踊るのがアプサラ(水の妖精、天女)たち、大マンダラ山の頂上を両腕と左膝で押さえ込んだようにしている神がいる。

神々の末尾は大蛇が内側に尾を靡かせており、それを両手でつかんで踏ん張っているのは猿の將軍ハヌマーンである。これもヴィシュヌ神と同じく背をこちら側にして歯をくいしばっている。これと対になる悪神たち(写真2)の末尾は大蛇の頭部であり、五頭すべてが右側を向き、目をむきだして歯をくいしばっている。なお、ここではっきりとしたのだが、海の底を区切っているのも大蛇で、こちらは五頭すべてが左側を向いている。悪神たちの曳く大蛇の頭部を抱えて踏ん張るのは他より大きな像の阿修羅である。顔が上下に三面あり、それぞれが左右に髪をなして三面ずつ描かれ、腕も右腕の一本は大蛇の鎌首をつかみ、他の二本は下から五頭のいわば胸元ともいう部分をつかんでいる。左腕は三つの髪で描かれ、大蛇の背に当たる部分を押さえ込むようにつかんでいる。

ところで伊東照司氏(注2)によれば、大マンダラ山の頂上を押さえ込んでるのはインドラ神かとし、ヴィシュヌ神が手に持つのは右手に車輪、左手に剣、そして亀はヴィシュヌ神の化身だということになる。また、綱曳きをする神々(デーヴァ)の総数は88名、ヴィシュヌ神から30番目にはシヴァ神かヴィビーシャナ(『ラーマヤナ』物語中の魔王ラーヴァナの弟)と思われる神と、さらにそこから29番目にはブラフマー神(梵天)が他より大きく現されているという。いっぽう、悪神たち(伊東氏はアスラこと、魔族と呼ぶ)の総勢は92名、左端の巨像は魔王ラーヴァナだとする。悪神たちの中にはもう二体、多面多臂で現された巨像が配されていることも指摘されているが、名称は不明である。その一体(写真3)は魔王ラーヴァナのように顔が三面、それぞれ左右に髪をなして三面ずつ、脚の踏ん張りなどは同じだが、右腕は髪をなすのを含めて五本すべてが蛇体を前から抱え上げると内側からののが四本見え、左腕は四本は同様に親指を上にして内側からつかみ取り、五本は内側からつかみ上げている、という点が異なっている。もう一体(注3)も顔・脚ともに同様だが、腕は右腕の抱え上げる五本が同じものの内側に見えるのは三本、左腕が蛇体を上からつかみ取るのが一本のみ、内側からつかみ上げるのは九本という違いがある。そのほかに頭・首・胸・腕・足首などの装飾品にも違いがあり、顔の表情にも力んだ感じが出ている。しかしこの二体の位置関係は記憶がはっきりとしない。

これが見たものの概要であり、自分で撮影した写真と、カンボジアで、また帰国後に購入した書籍とによって述べた。この「乳海攪拌」の浮彫を見ながら、さまざまなことを思い起こした。「乳海攪拌」のことはそれまでほとんど知らなかったのだが、「乳海」とはなになのか、それを

「攪拌」するとはなになのか。空海の漢詩文集『性霊集』（835年頃、真済の編）巻1「入山興」に「乳海子」とあり、仏弟子のことだという。「乳海」は仏教語として日本でも古くから使われていたわけだ。「攪拌」は古代語の中には見当たらず、せいぜい近世あたりからの語のようだ。海をかきまわす神話、また、蛇体を綱として曳き合うこと、山を支える亀のこと、などからは日本の神話・民俗・文化を想起させられた。さらに巨像の神たちの顔や腕の髷をなす描法はみごとに力強さと動的であることを現していると思われたが、現代のテレビや映画などの映像技法で、たとえば人が倒れるさまを小刻みに停止させながら連続して映す、あれをなんと呼ぶのかを知らないが、その手法の源流を示していると感じられた。

### 「乳海攪拌」神話

さて、この「乳海攪拌」を語るカンボジア神話の文献をいまだ見出していない。したがって不安定な論述にはなるのだが、これまでに知り得たことをまとめておくことにする。広く知られているように、「乳海攪拌」はヒンドゥー教の神話である。古代インドの叙事詩『ラーマーヤナ』（注4）第1篇「少年の巻」45「乳海攪拌の礼讃」には次のようにある。

（女神ディティと女神アディティの息子たちが）どうすれば、我々は無病息災で、年をとることもなく、また不死になることができようか、と考えた。かれらは考えた末に、「乳海をかきまぜて、そこから甘露の霊液（ラサ）を手に入れよう」と思いついた。そこで、かれらは決心して龍王ヴァースキを綱とし、マンダラ山を棒として、測り知れないほどの力を發揮して乳海をかきまぜた。そして、一千年のあいだ乳海をかきまぜたとき、綱の蛇が歯で石を噛み、その頭から猛毒を吹き出した。このハーラーハラという猛毒は流れ出ると、あたかも燎原の火にも似て、神も人間もアスラも含めて、すべての世界を毒で焼きつくしはじめた。

ラーマ王子の求めに苦行者ヴィシュヴァーミトラ仙が都城ヴィシャーラーに関する昔話をする場面である。引用部の後、シヴァ神がその毒を飲み干し、神々やアスラがふたたび乳海をかき混ぜると、マンダラ山が地下界に沈み始める。それをヴィシュヌ神が亀の形になって背で山を支え、手で山の頂をつかんで神々の真ん中に立って乳海をかき混ぜる。1000年たつとダンヴァンタリという男が棒と水瓶を持って現れ、美人アプサラスたちも現れ、馬と宝珠、最後に不死の霊液の甘露が生じた。これを獲得しようとディティとアディティの息子たちの間で大戦争になり、ディティの息子たちは殺された。その後、プランドラ（インドラ神）が王位につき、聖仙や天上の楽人たちも含めた世間を、心もはればれと統治した、というのである。

次に『マハーバーラタ』（注5）第1巻「最初の巻」第15章～第19章の場合で見よう。吟誦詩人が苦行者アースティーカの物語を聖仙シャウナカに語るという形をとる中での話である。甘露（アムリタ。不死の霊薬）を得るために海を攪拌した時に、ウッチャイヒシュラヴァスという神馬が生じたことへの問いである。

光り輝く最高の山メール（須弥山）（の頂で甘露を求めて神々が相談している時）ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）は、梵天（ブラフマー）に次のように言った。「神々と阿修羅（アスラ。悪魔）の群とで、海を攪拌すべきである。大海が攪拌されれば、甘露が生ずるであろう。神々よ、海を攪拌せよ。そうすれば一切の薬草と一切の宝を得てから、甘露を得るであろう。」（以上、第15章）

マンダラ山は一万一千由旬(ヨージャナ。距離の単位)の高さ、同じだけ地下にもぐっている。それを強力なアナンタ竜が引き抜き、神々が海へ運び、亀の王アクーパラの背を支点にする。

このように、マンダラ山を攪拌棒にして、ヴァースキ竜王をそれに巻きつけて、神々と悪魔たち(ダイティヤとダーナヴァ)はこぞって、甘露を求めて海を攪拌し始めた。偉大な阿修羅たちは竜王の一方の端(頭部)を持ち、一切の神々は、そろってその尾の方に行き立っていった。アナンタは、聖なる神ナーラーヤナのいるところで、竜の頭を何度も持ち上げては投げ下した。

ヴァースキ竜の口から煙と火をとまなう風が出、煙は稲妻をとまなう雲となって雨を降らせ、山頂から花の雨が降り、神と阿修羅の群を花でおおい、雷鳴のような大音響が起り続けた。海中の水棲動物は砕かれ死滅、山の樹々鳥もろとも落下、樹の摩擦で生じた火は山をおおい、逃げ出した象や獅子を焼いて生物はすべて死滅した。神々の主インドラが一面の雨を降らせると火は鎮まった。

すると種々の大樹の樹液や多量の薬草のエキスが海水の中に流出した。その甘露のような力を持つエキスの乳液により、そして黄金が溶けた液によって、神々は不死になった。かくてその海の水は乳となった。そしてその乳から、最高のエキスと混じった凝乳(グリタ。バター上の乳製品、ギー)が生じた。

疲れた神々はヴィシュヌに力を授かり、次のように続く。

こぞって再び海の乳を大いに攪拌した。すると、攪拌された(異本の読み)海から、百千の光線を持つ太陽が生じた。そして、清涼な光を放つ輝かしい月が生じた。引き続いて、白衣を着たシュリー(吉祥天女)が、凝乳から生じた。また、酒(スラー)の女神と白馬が生じた。そして、甘露より生じた神々しい宝珠カウストゥバが現れた。それは燦然と輝き、美しく、ナーラーヤナの胸に懸けられた。シュリー、酒、月、駿馬は、太陽の道にならい、神々の側に行った。それから、美丈夫ダヌヴァンタリ神が、甘露の入った白壺を携えて現れた。

悪魔たちの間に甘露を求めて大騒ぎが起こったので、ナーラーヤナ神は幻惑術ですばらしい女の姿で悪魔たちを魅了して迷わし、甘露を手にした。(以上、第16章)

さらに悪魔たちと神々との間で甘露争奪戦があり、ラーフという悪魔が神の姿になって甘露を飲もうとした時、月と太陽の知らせで円盤(チャクラ)を武器とする神(ヴィシュヌ)はラーフの頭を円盤で切った。ラーフの恨みは今日でも月と太陽を呑む、これが日食・月食の起源。結局、ヴィシュヌ神の日輪にも似た鋭い輪を持つ円盤スダルシャナとナラ(ナーラーヤナと一対の神格)の弓矢の働きによって神々は勝利した。(以上、第17章)

以下、神馬の色をめぐるカドルーとヴィナター(神々の時代にいた造物主の娘。第14章に息子をめぐるとの話がある)との賭けの話があり(第18章)、ふたりの大海原のようすを見る話で終わっている(第19章)。

こうしてみると、『マハーバーラタ』の語りは『ラーマーヤナ』のそれよりも一段とわかりやすい。なによりも「乳海」ということばの由来が語られていて納得しやすい。またヴィシュナ神の多様性も具体的に語られていて、特に円盤を武器とする神だとある点は、浮彫図で右手に持つのは「車輪」というよりも「円盤」とした方が呪具としてふさわしいのではないかと考えられる。

「乳海攪拌」を語る文献には、このほかに『ヴィシュヌ・プラーナ』『パーガヴァッタ・プラーナ』があり、より詳しいという。しかしこれをいまだ読み得ないから触れないでおく。

### 「かきまわす」創世神話

アンコール・ワットのこの浮彫「乳海攪拌」図を見て最も興味を覚えたのは、「海をかきまわす」という点にある。それは日本神話にもあることだからである。

(イザナキ・イザナミの) 二柱の神、天の浮橋に立たしてその沼矛<sup>ぬぼこ</sup>を指し下ろして画<sup>か</sup>かせば、塩<sup>な</sup>こをろこをろに画<sup>な</sup>き鳴して、引き上げたまふ時にその矛<sup>きさき</sup>の末より垂<sup>した</sup>り落<sup>か</sup>つる塩<sup>な</sup>の累<sup>かさ</sup>なり積れる、島と成りき。これ淤能碁呂島ぞ。(『古事記』上巻)

ここに「塩」とあるのは「潮」に同じく、すなわち海潮<sup>うしお</sup>から塩を採ったからいうのである。海を掻き鳴らすことに等しい。『日本書紀』第1巻・第4段一書第一には「滄海<sup>あそうなばら</sup>を画<sup>か</sup>して」とある。この後、二神は結婚して島々・神々を生む。いわば日本の創世神話の一部の表現である。これと「乳海攪拌」神話が海をかきまわすという点で共通していることは古くから言われている。そして類型はモンゴル神話などにもあるという。それらを踏まえて吉田敦彦氏(注6)が、

日本のオノゴロ島神話は、このようにして内陸アジアの遊牧民の間で成立した、「大洋攪拌型」とも呼ぶべき独特のタイプの陸地創造神話が、アルタイ系支配者文化と共に流入したものであり、その源流は、インド神話に淵源すると見るべきであろう。

というのは、いかがであろうか。確かに「かきまわす」という点では共通しているが、日本の例は「塩(潮)」つまり海であるから、海洋民の文化から考えてみる必要もあるのではなからうか。しかしその事例をまだ知らない。

もうひとつ気になるのは山を攪拌棒にした点である。やはり思い起こしたのは『出雲国風土記』の国引き神話である。ヤツカミツオミツノノミトが出雲国は小さいので国引きをして作り縫うことにする。その時に綱を架けるカシ(杭)にしたのがサヒメ山や火神岳である。ここには「かきまわす」ことはないが、山に綱を架けることは共通していると見ることはできよう。カシは船をつなぎ止めるものであるから、やはり漁民、強いて言えば海洋民の発想として、攪拌棒の派生したもの、もしくは変形と見ることはできようか。

### おわりに

アンコール・ワットの第一回廊には、他にもうひとつの「乳海攪拌」の浮彫がある。南西隅堂にあるのがそれだが、図柄が異なる。大マンダラ山は棒状に細く、その両脇に太陽神と月神を描いた円がある。ひとつの回廊に異なる「乳海攪拌」が描かれているということはどういうことなのだろうか。ちなみにこちらの図柄のものはプリア・ヴィヘアにもあるという。また、東面南側のものを簡略化した図柄のものが、パイオン第二回廊西面北側にもある。

あまり気乗りのしないカンボジア行きであったが、実際を目にして見ると、すっかり圧倒されてさまざまな宿題を抱えたまま帰国した。急遽、文献探しが始まってにわか勉強をすることになった。ここにやっとそのひとつをまとめてみる事ができた。専門外のこととて、なにを解決、あるいは提言したというわけではないが、ご教示いただければ幸いである。

注1 『地球の歩き方 アンコール・ワットとカンボジア '10~'11』

ダイヤモンド・ビッグ社、2009年12月18日刊

注2 伊東照司『アンコールワットの彫像』

雄山閣 平成21年5月30日刊

注3 見落としたようなので、カンボジアで購入した次の文献の写真による。

Jaroslav Poncar | Thomas S.Maxwell: OF GOODS, KINGS, AND MEN The Reliefs of Angkor Wat , SILKWORM BOOK, Thailand, 2006

注4 ヴァールミーキ『ラーマーヤナ』岩本裕訳

平凡社・東洋文庫 1980年4月23日刊。ただし、表記を一部改めた。

注5 ヴィヤーサ『原典訳 マハーバーラタ』上村勝彦訳

筑摩書房・ちくま学芸文庫 2002年1月9日刊。ただし、表記を一部改めたほかに、説明を補った箇所がある。

注6 吉田敦彦『小さ子和ハイヌウェレ』

みすず書房 1976年8月23日刊



写真1 アンコール・ワット「乳海攪拌」浮彫の中央部。写真パネルによる。



写真2 アンコール・ワット「乳海攪拌」浮彫の左方部、悪神たちの末尾。

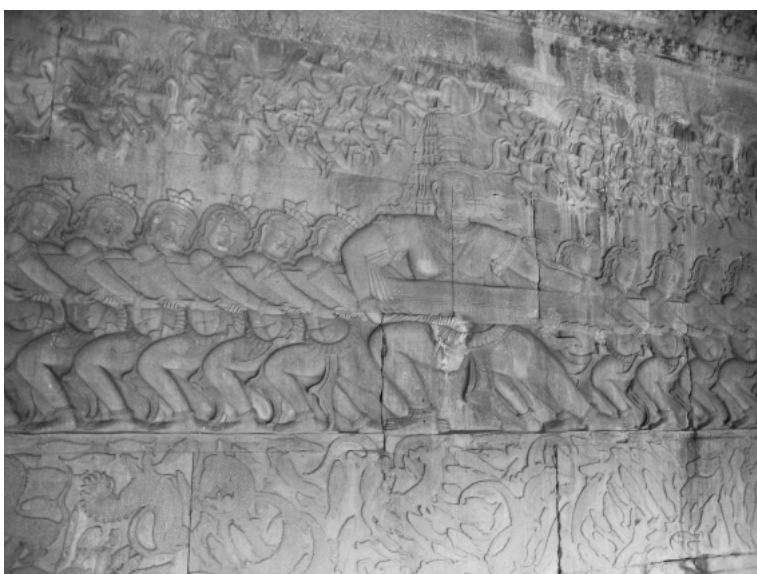


写真3 アンコール・ワット「乳海攪拌」浮彫の左方部、悪神たちの一体。